

近世における専阿の「西方四十八願所」巡拝について

長谷川 匡 俊

はじめに

巡礼というとき、まずわれわれの脳裏に浮かぶのは、四国八八箇所の弘法大師の霊場であり、西国・坂東各三三箇所、秩父三四箇所の観音霊場である。これらの巡礼は中世もしくはそれ以前からの長い歴史を持ち、僧侶や民衆の修行と信仰生活の中に深く根をおろして、こんにちまで生き続けてきているが、このほかに、阿弥陀仏や薬師如来、地藏等の礼所を巡る本尊巡礼、法然・親鸞・日蓮等の祖師の遺跡やゆかりの寺々を巡る聖地巡礼なども盛んであったから、そのコースは夥しい数にのぼる。

ことに江戸時代にはいと、政治の安定と、それにもなう治安の確立、生産力の増大と農民自立政策の推進による独立自営農民の広汎な成立、さらに都市の発展により商人が上昇し、農民・商人等民衆の多くが参詣の経済的、身分的可能性を獲得した上、

参詣を援助する講・頼母子等の共同体的結合が広く普及したこと、そして交通路、交通施設等の交通環境の好転により、旅にまつわる苦行性がしだいに解消していったこと、などの理由によって、多くの民衆を各種の巡礼へとかりたてていった。^①西国・四国等の大規模な霊場にくわえて、地方霊場が激増してくるのもこうした条件を背景としてのことであり、この傾向は一八世紀中頃以降に顕著である。地方霊場は、いわば大霊場を親として新たに生まれた子にあたり、地方民衆の信仰要求（身近な巡礼要求）が大霊場との距離的隔たりを埋めるべく案出させたものだが、同時に、寺院・教団側の布教・教化策の一環として設置されたという面のあ

ることにも注意しなくてはならない。
さて、本稿でとりあげる「西方四十八願所」は、以上にみえきたような一般的な巡礼の盛況を背景として、直接的には民衆に弥

陀信仰を喚起しようとする浄土宗系（西山派を含む）僧侶等の一連の布教信仰運動の中から誕生したものである。浄土宗系の札所巡礼には、①阿弥陀仏の霊場巡り、②宗祖法然の遺跡巡り、③関東十八檀林巡りの三種類がある。まず弥陀信仰に関する巡礼には、弥陀の四八願に因んで阿弥陀仏を安置する四八の札所寺院を巡る四八願所巡拝というのがある。管見でもっとも古い例は、後述する「洛陽四十八願所」で慶長一八年（一六一三）の創設にかかるが、江戸中期以降には各地に四八願所の弥陀霊場が設けられている。このほか六箇所の阿弥陀仏を巡拝する「六阿弥陀詣」もまた江戸をはじめ各地で行われていた。^②

つぎに、宗祖法然の遺跡巡拝には「円光大師二十五霊場」巡りなどがあり、その濫觴は洛西如来寺廓誉の発願で、遺弟の難波恋西庵順阿霊沢の実施になる宝暦一二年（一七六二）の行脚巡拝にあるといわれる。法然の遺跡巡拝に関しては、藤堂恭俊、伊藤唯真両氏の詳細な論文があるが、ことに伊藤氏の、宝暦前後における浄土宗内の信仰状況（法然への回帰）に着目して、「近世に興った専修念仏昂揚運動のなかに、法然上人の霊場巡拝が主唱されていることは、遺跡巡拝の意義を考える上に大きな意味をもっている。霊場巡拝は、単に真宗の二四輩や西国巡礼に刺激されて生じたものと片づけられるものではなく、かかる信仰史的背景をもって必然的に生じてきたものであって、廻国巡拝の形を借りた還法然運動であった」とする指摘は傾聴に値する。なお明和年中には

じまる関東十八檀林巡りについても、法然の遺跡巡拝との関連ですでに上記両氏が言及されているので併せて参照されたい。

では以下に、幕末において念仏信仰の宣布に一石を投じた専阿の「西方四十八願所」巡拝につき、札所撰定の経過および特徴、設置目的、詠歌、拝礼式、巡礼保護策、念仏地藏尊の性格などを明らかにし、その信仰・教化史上の意義を探ってみたい。

一、専阿と「西方四十八願所」

「西方四十八願所」の撰定者（発願主唱者）専阿とはいかなる人物であったか、まず見届けておきたい。専阿の伝記を収めたものに、公阿旦空の『専念往生伝』がある。^④

同伝によれば、浄土宗西山派の僧で、正しくは裔空寛苗といい、専阿と自称して、乗誓と号した。生国は尾州熱田（中瀬町）で、幼年時に同国知多郡常滑正住院（現西山浄土宗）に入寺、量空を師として剃髪受戒した。のち洛西粟生光明寺（現西山浄土宗本山）において修学し、宗戒両脈を相承すると、師命により正住院第二三世の法燈を継いだ。ついで香衣着用の綸旨をも受けるが、栄達を好まず、厭離穢土、欣求浄土の志念に燃え、ひたすら念仏に明け暮れる日々をおくっていた。三六歳のとき、ついに寺務の煩いを通れるため隠居した。これより夏は洛西善峰の深山に草庵を結んで幽棲し、冬は正住院の境内に同様の隠室を構えて自行化他た

だ念仏の一行をもつてした。日課の念仏は五万遍、あるいは六、七万遍に及んだという（このあと伝記は、専阿が国内各地の霊場を巡拝し、西方四十八願所を撰定したことや念仏地藏尊のことなどに話が及ぶが、この点は後述する）。かくて専阿は、天保一二年九月、洛西善峰の草庵にて発病した。同月中旬、正住院に戻ったものの、病状は日ましに悪化し、臨終を迎えることとなる。伝記は臨終時の模様を次のように伝えている。「師、必死のおもひに住して、称名精勵にして、欣慕最す、む、同廿四日より来迎の御影を西壁にかけさせ、頭北面西右脇に臥し、臨終行儀をと、のへ、迎接をたまわる、同廿七日より、念仏の声かすかにして相続し、同廿九日の夜、病苦もなく念仏の声とともに、禪定に入がごとくに、円寂し給へり」と。正住院在住十二年、行年五九歳であった。^⑥実に念仏者の手本といふべき往生の相であるが、後述するように、彼の西方四十八願所巡拝の意趣もまた、この日の為にあつたのであり、専阿自らが身をもつて正念往生の現益を証明した訳である。

この「西方四十八願所」の詳細については、専阿の『弥陀霊像西方四十八願所縁起』（以下『縁起』と略称す）四巻および弟子元阿の『顕志録』一卷により知ることができる。『縁起』は、専阿が現地で集めた四八箇所の本尊の縁起資料に、後述する詠歌・翼添の歌を加えて編集したものを骨子とするが、さらに尾張国部田祐福寺（浄土宗西山派紫衣檀林）の良範（亮）が読者への教化と便宜のため、詠歌等に詳しい註解を加えたので全四巻になったといい、天

保二年二月の自序（専阿）をもつ。なお、往生伝の編者として名高く、江戸末期を代表する学僧で布教家の洛東専念寺隆円（一七五九〜一八三四）はこの専阿の志に感じ、華頂宮尊超法親王に『縁起』を上覧したところ、親王は六字名号を賜わった。『顕志録』の方は、洛北鴨隠士元阿が「吾師専阿上人の意願を此録に私記す」と述べているように、師の志を継ぎ、後人の西方巡礼のよき手引きとなるべく著されたもので、天保四年初夏の序をもつ。では、以下まず札所撰定に至る経過から窺ってみることにしよう。

抑この四十八願所ハ吾師（専阿）十二、三歳の頃、幼意（おさなきころ）におもひ給ひけるに八十三仏にハ四国と名づけて霊場あり、観音にハ西国と称し、地藏にハ廿四ヶ所とまうし、元祖にハ廿五霊場といひ、諸尊国々に於て撰定の札所あり、しかるに我ら凡夫の為にハ諸仏よりも諸神よりも日月よりも天地よりも広大深恩の阿弥陀仏に何とて札所ハ無きや、うらめしく痛しき御事ぞかし、我れ六十余州にて霊像を撰発して巡拝場を改定し奉り度ことならむと思ひながら年久しく打過たまひける。^⑦

（ここには、諸尊には各地に札所があるが、なぜ諸仏・諸神よりも深恩を受けている阿弥陀仏に札所がないのだろうか、といった信心深い少年の素朴な疑問やくやしさと、それならば自分がその札所の撰定を試みてみたいという専阿の初志が伝えられている。すでに札所撰定の志願は専阿の少年期に芽生えていた。そのときの思いが、四十歳の春、ある僧から「洛陽四十八願所」の由来を聞

くことによつて一気に爆發し、彼を初志実現へとかりたてたのである。弟子元阿の記すところによれば、その由来と西方札所撰定の経過は下記のようなものであった。

洛陽四十八願所今の古四十八願所是なり、昔し洛西善峰の源光法師と云

僧出離の要道ハ何の法か勝れけるやと、断食苦行して本尊觀

世音の宝前に一七日の間通夜し、祈念せられけるに、満る明

方慶長十八年三月十四日何方ともなく化僧あらはれたまひて、只今より

都誓願寺へ参詣せんと手を取て誘引したまひ、彼寺の本尊前

に詣で、其夜念仏して籠り給ひけれハ、檀上より貴僧現れ給

告て曰く、汝出家得道以来三十余年の星霜ふれども未だ生死

解脱の要法を知らず、是か為に今日善知識有て我か前に誘引

せられんこと、善哉々々、我浄土に往生せんには念仏にハシ

かず。猶助業にハ帝地に我か靈像四十八躰あり尤至極の靈像なり六八超

世の本願を信じて四十八ヶ所の精舎これくゝと今の第一より

終りの四十八まで口授したまふと覺へて夢さめぬ。源光は本

尊の勅撰の靈場を一月三十日に四十八ヶ度ツ、西方往生、西

方往生と高声に唱へて念仏まうし巡拝し、終に目出度往生の

素懷を遂げられけるといひけれバ洛陽六八靈場記といふ三卷の縁起あり師是を聞給

ひてより心に思ひたまひけるハ、予か従來の念願いよくゝ仏

意にかなはせ給ふ御事なりと歡喜の心浅からず、いさみす、

んでしきりに發起し、翌年の春諸国を巡歴し給ひ、靈山靈地

をとはず、寺の大小堂楯を云ず、石木繪像と法号をも論ぜず、

た、感応いちぢし、白き靈仏のミを撰び奉り、札所と改定して其寺々の本尊の縁起を乞ひ受歸り、調述し詠歌、翼添の歌をのせ給ひける、^⑩

洛陽四十八願所^⑪は、慶長一八年、洛西善峰の源光法師に誓願寺の阿弥陀如来の靈告が下つて定められた靈場である。元阿は、「此れ所ハ誓願寺如来の御撰にして源光法子へ口授し玉ひける靈仏なれば、日本無双の靈場なり。西国よりも四国よりも其外の靈仏靈地よりも貴し。世ハ広しといへども如来自ら勅撰の札所ハ未だ見聞せず」と述べているが、このことはまた、師專阿が洛陽四十八願所の由来からいかに強い刺激と影響を受けていたかを示すものでもある。專阿が自ら抱いていた西方札所撰定の願に確信を持ち、勇んでひとり諸国巡歴に旅立ったのは、四一歳、文政六年（一八二三）春のことである。札所の撰定は、これより天保二年二月に『縁起』を上梓するまでの間の比較的早い時期に行われたものと思われる。信濃の善光寺にはじまり上記の京都三条誓願寺を結願とする四八の札所については、稿末に一覽表を載せておいた。

といった、專阿による札所撰定の基準はどのようなものであつたらうか。上記によれば、「靈山靈地をとはず、寺の大小堂楯を云ず、石木繪像と法号をも論ぜず、た、感応いちぢし、白き靈仏のミを撰」んだとあり、專阿も「縁起（『弥陀靈像西方四十八願所縁起』の本文を指す）二著ハス如く、日本国中ニテ感応格別ノ靈像等ヲノミ撰ヒ奉ルナリ、ソエニ遠国ノ靈像ハ九躰寺ニテ遙拝セシムルナリ」と^⑫

云つているところから、地域範囲を国内諸所にもとめ、霊場としての知名度や寺の大小新古、仏像と名号とを問わず、とくに感応の顕著な霊像等に限ったことが知られる。

この場合の「霊像」とは、「信者の祈願ニ応シ玉フテ出現シ玉フ瑞像モ在シ、或ハ光明ヲ放チ玉フテ金銅ヲ照シ玉エバ仏像ト変現シ、或ハ太子ノ頭上ニ顕現シ玉ヒ、或ハ夢中ニ授ケ玉フ等アリ」とみえるように、さまざまな現瑞・奇瑞につつまれた仏像等を目指している。具体的には稿末の一覽表の「霊像由来」を参照されたい。こうしてみると、洛陽四十八願所が京都の地に限られていたのとも異なるし、同じく専阿の西方札所撰定に先立つが、「霊像」を撰んだ訳ではない。「善光寺如来分身四十八願所」^⑮とも異質であつて、そこに西方四十八願所の独自のカラーが見届けられる。ただし、専阿はこの西方札所を含む三つの四十八願所をそれぞれ「西方」「仏撰」「分身」と号して、一口に呼ぶときは、「四国・西国・秩父・坂東」と云うように、「西方・仏撰・分身ノ三品四十八願所」と称しておのおの尊信すべきだと説いている。^⑯

つぎに、札所一覽表から、札所の所在地、宗派分布、他札所との重複、霊像の種類等についてふれてみよう。まず所在地を旧国別に多い順からあげると、山城18、大和7、尾張5、近江4、伊勢4、紀伊3、摂津2、河内2、和泉1、播磨1、信濃1となり、一一カ国に及ぶ。近畿地方に集中しているが、西国札所と違うところは、西山派寺院の多い尾張が加わり、伊勢と信濃を含んでい

る点である。これに遠国一一カ所の遙拝所を加えねばならない。その内訳は、越中2、甲斐2、武蔵2、伊豆1、陸奥1、紀伊1、長門1、築後1、肥後1で、東国と西日本を含み、全体として日本全土から撰定したかたちがとられていることに注意したい。

宗派別では、浄土宗西山派13、浄土宗鎮西派（現在の浄土宗）10（内真言兼2）、天台9（内真言兼1）、真言6（他に真言兼3）、時宗3、四宗兼学3、華嚴・三論、法相、八宗兼学、大念仏宗各1の順で、遠国一一カ所の内訳は、浄土宗鎮西派4、天台3、浄土宗西山派・真言・禪・不詳各1となる。日蓮宗と禪宗（含例外1）がないのは当然だが、真宗も見えない。これらを除くとあとは南都仏教や霊山も入り混りバラエティーにとんでいる。あまり宗派にとらわれずに撰定されたことが察せられるが、それでもやはり浄土宗系が多数を占め、中でも専阿の属する西山派が目立つ。この点は西山派の多い地域から札所が撰ばれたことも関係し、そこに自派の教線拡張の意図が含まれていたことはいうまでもなからう。

浄土宗系他札所との重複については、表の札所番号に印がついてある。それによると全部で一五カ所（十遠国二）が重複していることになる。なかには善光寺、欣浄寺、勝林院、真如堂、知恩院、本覚寺、清涼寺、粟生光明寺、一心寺、誓願寺の計一〇カ寺のように、二つ以上の札所と重なり弥陀信仰の根強さを語っているものもあるが、ことに誓願寺に至つてはすべてに名を列ねてい

る。いかにその本尊の靈験が世に流布し、諸人の尊信を集めていたかが俛ばれよう。

そこで最後に靈像の種類や性格についてであるが、曼荼羅五、名号四（この中には正住院の糸引名号も入っている）のほかはすべて阿弥陀仏像（含弥陀三尊）である。注目すべきは、何らかのかたちで神祇（明神もしくは権現）が介在している靈像の多いことである。たとえば、神の靈告により如来を感得、神の本地仏を感得、神より授けられた本尊、神より古木等を授かり刻んだ如来、神の作られた本尊、などといった具合である。こうした点は先の靈山を札所としている神祇尊重の立場とともにその西山派宗義などとの関係を検討すべきであるが、今はこれ以上立ち入れない。また、全体として「靈告」「感得」等の神秘（信仰）体験を通してもたらされたとする靈像の多いことをあげねばならないが、天智・聖武・嵯峨天皇の勅願によるもの、貴人・貴僧・中将姫にまつわるもの、如来の威神力が示されているもの等々、いずれも「靈像」の名に値する珍しいものばかりであった。諸国の寺々を訪ね、本尊の縁起を丹念に調べて札所の撰定に当った専阿の苦心のあとがうかがわれる。

二、西方札所巡礼にこめられた専阿の意願

ここでは元阿の『顕志録』より、師専阿が発した西方札所巡礼

に対する「誓願」について考えてみよう。

ある時師（専阿）、彼四十八ヶ所の諸本尊に誓て云く、我が撰発奉る札所へ一度巡拝の道俗ハ、最期の病中床の上にて大小二便の不浄を見せしめ給はず、心身に苦痛無く臨終正念にして来迎引接し給へ。又誓て云く、かくのごとく心願成就させ令給はん為に、西方巡拝の行者一人も残らず如来誓願寺勅撰洛陽の札所にも巡拝させ令む願には、哀愍を以て末代の人民我教に随て西方・洛陽両札所巡礼させ令給へ。又誓て云く、当今ハ末法現に是五濁悪世なり。故に世間の人民臨終に悪相を見、身心に苦痛ありて速かに息たへず苦む人多し。願ハ是等をおむ為に札所の諸本尊の御符護并護拜服名号を吞せなば何れ札も一ヶ所のをのめばよろし・御符一速ち正念にして眠が如く往生を遂さしめ給へ。我今誓ひ奉りければ、札所の寺々より彼二品を出し、巡拝の人に授けられけること末代迄の風儀とさせしめたまへり。冀ハこの事世に流布し、六十余州の人民彼の品を受歸りて自他の臨終に用ひなば、如来の大慈大悲を垂たまひ苦痛を救ひたまへ諸国札所の諸山へ願ひ奉る。惣て札所毎に御符と拜授け玉ハ、凡日本国中にみちて諸の人民臨終の苦痛まぬかれること疑ひなし。こひねがハ、八年々定日として衆人を集め其山々の本尊の宝前において一七日の別時念仏を修したまひ、時の丈室和尚ハ大慈大悲心を発したまひ、衆生の業障消滅して臨終正念往生極楽の爲に念仏加持したまへ。又願ハ加持ハ教道に過す。故に常の勤行度毎に祈念しと一心に誓願を發して四十八日の別時念仏三ヶ度まで修行し給ひけり。^①

右記の文章によれば、専阿は、彼が撰んだ四八箇所の諸本尊に

対し、次の三つの誓願をおこして四八日の別時念仏を三度まで修したという。第一は、西方札所へ一度でも巡拝した者は、終末の病床にあつて二便の不浄をあらわさず、身心に苦痛なく、臨終には正念に住して弥陀の来迎をこうむり往生を遂げられるようにとの意。

第二は、右のような心願を成就せしめるためにも、西方札所巡拝の行者にはわが教えに随い必らず洛陽四十八願所の巡拝をもあわせ行うよう誘導してもらいたいとの意。

第三は、臨終に悪相を見、身も心も苦痛のどん底にある者でも、札所本尊の護符および拝服名号を吞ませたならば、その功德によつて速かに正念往生が遂げられるようにとの意。そして、その誓いにより、各札所寺院において巡拝者に護符と拝服名号を授けることが末代までの風習として世間に流布し、この二つを持ち帰った者がこれを自他の臨終に服用したならば、その者の苦痛が止むようにと願っている。

以上によつて、専阿の西方札所巡礼の意図ないし功德観は明らかである。それはひとえに臨終来迎・正念往生のために帰する。彼が「臨終和讃」¹⁸を作つてまでして諸人に臨終の用心を示したことを想起すべきである。このことは元阿が、「いつ国も現世利益の参処に繁昌すれども未来往生のことハ皆々とし。なげかわしきにあらずや」¹⁹と、現世利益を目的とした巡礼の流行に批判を加え、後世往生のための巡拝を勧め、西国巡礼の人も先に必らず西

方・洛陽の両札所に参詣するよう示唆しているのに通じる。興味深いのは、札所本尊の護符ならびに拝服名号の功德を誓願し、各札所でこの二つを念仏加持して用意し、それを巡拝者に授与してもらいたいとしている点である。たとえ巡拝した者でなくとも、この二つの効験により臨終の苦痛をまぬがれ、正念に往生が遂げられるようにというのであるが、この点は各札所本尊が前述したごとくいずれもただならぬ「霊像」であることと関係していよう。当時、護符はもとより、拝服名号の功德もまた除難・除災等、とかく現世利益の具として喧伝されていたのだが、拝服名号が病者の臨終正念のために用いられていたことは先例がある。江戸中期以降、祐天・観徹・雲説・貞伝・徳本など浄土宗の高僧が人びとに拝復名号を授与し、数々の現益をあらわしたことは諸書に伝えられるが、無能のように「御名号を、直に病人にのませ候ハバ、尊き御名号の文字、やがて不浄所に落入候べし。……都て宗祖のなし給ハざることハ、決して用ひ給ハざるやうになさるべし」と、²⁰深い名号尊崇の信仰とひとえに宗祖法然の行実規範をもとめる厳格な姿勢から、俗信に流れやすい拝服名号を手厳しく批判している僧もいる。いま、専阿のかかる誓願を見るにつけても、彼が利に聴い民衆の念仏信仰を喚起するため、俗信と紙一重の護符・拝服名号の功德を掲げ、彼らのインスタントな利益要求に応えようとしているところに苦心のあとがうかがわれよう。

西方札所巡礼の意図としていま一つあげねばならないのは、巡

札が念仏修行専念の場を提供することになるといふ点である。すなわち元阿が、「殊にこの霊場を巡拝すれば三百余里の道法なれば、大方六七十日もかゝるべし。其間別時中と心得て如法に口称三昧に入たまえば、其利益を蒙らざる事なし」と述べ、また「世間を觀るに我家に有てハ世用のミに曳れ明暮れ忽々として口に称名の出る事なし。かくの如きの人ハ道中を往来の折々口称するにしくことなし」と云っているように、日ごろ世事に追われている人たちにとつてみれば、二カ月余に及ぶ札所巡拝の道中は実に口称念仏の策進に絶好の機会となるものであった。

三、西方札所の詠歌と札所拝礼式

西方札所巡礼の特色の一つに、一連の豊富な詠歌がある。稿末の表に見える「西方導詠歌」と「翼添の歌」各一四四首がそれぞれある。このうち三七首は古歌を用い、ほかはみな専阿自身が詠んだものである。その意図は、「愚鈍無智の老若男女の安心を心得べき御文とてハ、円光大師の一枚起請文の外にハ手近き御文章ハなきなり。尤も祖師古徳の法語和歌ハ数多あれ共甚深の文柄にしてわかりがたし。たとひわかりたりとも長文にて又覚へがたし。故に在家に流布せざるなり。(中略)しかるを近頃在家の身にてものを知らぬ男女に對し、彼是安心をむつかしげに申立て人をまどハす事あるなり。吾師ふかく是を憂てかくの如く西方札所の詠歌と

さだめ、世に流布せしめて諸人を導みちびかとしたまふなり」とあるように、一文不知の愚人のために正しい信心の糧として、平生の営みから臨終の用心にまでいたる詠歌並びに翼添の歌を用意したことが知られる。

また元阿は、そうした愚人や、無慚愧の人、無信心の人のためになる詠歌と翼添の歌であるからこそ、端唄・音曲などの益なき戯れをやめて、むしろ詠歌を覚えて誦うようにと勧めている。その場合にも「願くハ男女とも稚き時願くハ男女とも稚き時親この慈悲を以て行住坐臥に口うつしに教へたまふべし。是を知らぬ人ハ世の中の大耻辱なりとおもひ、自らも覚へ他にも教へたまふべし。又ハ寺小屋にて一日に一首つ、おぼえそらんずべし。幼年の時覚へし事ハ年聞て忘る、事なし。心なく一遍にてもよミ給ハ、心の底に残りていつかわ往生の縁の端ともなるべし」と、家庭もしくは寺小屋において幼年時より教へ込むことが肝要だとし、それがいつの日か浄土往生の助縁にもなると詠歌による教化法を説いた。そして朝暮の勤行の際、札所一カ所の詠歌と翼添の歌とを六首ずつ「回り誦よ」にするよう勧めた。「回り誦」とは、一番の詠歌と翼添の歌とを朝の勤行で、二番の詠歌と翼添の歌とを夕の勤行でそれぞれ誦み、翌朝は三番の歌で、四番のは当日の夕の勤行で誦むというものであり、二四日で四八番までを誦み終る勘定になつている。こうしてふたたび一番に戻り、生涯これが続けてゆけば親子兄弟使用人等家内残らず、見聞の人に至るまでおのずか

ら暗誦できるようになるという。ここに詠歌の日常化が意図されているが、いま一つ注目したいのは、元阿は自分が定めた「札所拜札式」^②をもって日常勤行式にあて、「何宗によらず極樂を願う人此式にて事足たりぬ。外に誦経するに及ばず」といい、西方巡礼の勤行式こそ、念仏往生の安心を決定する上でよき導きとなるとしていることである。参考までに、「札所拜札式」の大略を左に記しておこう。

札所拜札式

まず堂前にて手水をつかい、納札と参物を謹みいただき、真実に供養の思いに住して養錢を納め、一心に合掌して如来の尊容を拝す。

三拝

次、一心敬礼と調師役中音にて唱あげ

土足ならば床机に腰をかけながら合掌してうつむき立ながら南無阿弥陀仏

おがみあげ南無阿弥陀仏

うつむきながら南無阿弥陀仏

かくの如く一拝念仏三声にて三べんすべし

次、懺悔文

我昔所造諸悪業 皆由無始貪瞋癡
従身語意之所生 一切我今皆懺悔

身口意の三業をつし、し、誠のこころをいだして無始よりのあらゆるつみ、ま三宝のまへにてさんげとてあやまり奉りぬれば、一念の間に無量無辺の

つみ霜の如くきへはて、清浄の身となりぬとおもふてとなふべし
次、三帰

調師よみ願従今身 同行盡未來際

帰依仏両足尊 帰依法離欲尊 帰依僧衆中尊 三遍

次、三竟

帰依仏竟 帰依法竟 帰依僧竟

次、同行南無西方極樂世界大慈大悲大願強力四十八願王世尊

阿弥陀如来合掌して三遍し

次、信機の文

調師よみ上ニ者決定シテ深ク信ス 同行自身ハ現ニ是レ罪惡生死ノ凡

夫曠劫ヨリ已来タ常ニ没シ常ニ流転シテ無レト有レコト出離ノ之

縁一 自身ハ極惡最下の大凡夫なるがゆえ成仏の様切はて、今に迷ふと卑下のおもひをなして唱ふべし

次、信法の文

調師二ニ者決定シテ深ク信ス 同行彼阿弥陀仏四十八願ヲモテ撰ニ

受シ玉ヘ 衆生一無ク疑ヒ無レ慮乘ニテ彼ノ願力ニ定テ得ト往生一

上ノ文の如く極惡不善の我等ゆへ諸仏に捨てられしを弥陀仏に上りあはれ玉ふて念仏を以て助け玉ふとおもふて唱ふべし

同行若我成仏十方衆生 称我名号下至十声

若不生者不取正覚 彼仏今現在世成仏

当知本誓重願不虛 衆生称念必得往生

次、同行十念この文を円光大師のたまわく、仏の四十八願の眼なり肝なり、神

あて心にも思ひ口にも唱へて耳にも聞べしとぞ仰られたり

次、詠歌 何番何国何寺と調師うたひ始歌のふし 西国詠歌の如く

て朝夕勤行の時もし経をよむ人ハ此処にてよむへし

次、調師至心発願

(善導大師「発願文」略)

この文りんじゅう正念をねがひめてたき往生をとけてのちざとりの身となりこの世にかへりこゝろのまゝに一切衆生をこくらくへみちびかんとくわんをおこすなりと思惟して見るべし

次、調師光明遍照

同行十方世界 念仏衆生 撰取不捨

次、同行真説念仏

千遍けたまふところへふかくしんじてとなふべし

次、調師願以此功德

平等施一切 同発菩提心 往生安樂國

わかまうすねんぶつを以て六しんげんぞくおよび法かひの衆生みなことごとく同ふしてわうじやうせんとおもふべし

次、同行如来本誓一毫も誤りなく願くハ仏決定して我を引接

し玉へ

南無西方極樂世界願王阿弥陀如来願往生(三字を二遍して)

十念

次、調師一枚起請文曰

拝誦

(同行、略)

次、念仏三拝

次、四弘誓願文

調師 衆生無辺誓願度 煩惱無辺誓願断 法門無盡誓願知

無上菩提誓願証 自他法界同利益 供生極樂成仏道

次、諸堂廻り立ながら 十念

了

つぎに、専阿の定めた「巡礼の掟」一ニカ条と元阿の着想による西方札所巡拝奨励の具体的方法を見届けてみよう。

巡礼の掟(十二ヶ条) 専阿述

一、西方詠歌翼添の哥等自も覺他にも敬朝暮勤行に誦たまふへし、

一、西方巡拝を善縁として洛陽四十八ヶ所へ必参り給ふへし、

一、巡礼帰宅まで五辛肉食すべからず、

一、邪婬を犯し大酒すべからず、

一、喧嘩口論ハ勿論万事を慎ミ瞋恚をおこすへからず、

一、慳貪放逸にせず、尤なりかたち如法たるへく苦、

一、同行ハ元より他人たり共巡礼の輩同入和合にして一蓮託

生の思を成べし、

一、善根宿ハ言ふにおよばず宿屋茶屋におゐて不行式致すべ

からず、

一、悪口雑話はうた姪哥高笑等を慎ミ明暮口に称名すべし、

一、神社仏閣並ニ諸尊金石等の形像前往來の時、恭敬の思ひ

有べし、

一、堂社の辺におゐて猥に二便すべからず、

一、寺社ハ元より諸向におゐてらく書てんこうすべからず、

右之条条々たく守りたまふべし

第三条以下の各条はおよそどの巡礼にもあてはまる遵守事項と思われるが、第一条で西方詠歌と翼添の歌詠唱を格別に勧めてい

るのは、前述のごとく念仏信仰の安心を決定せんがための専阿の配慮であつて、西方巡礼の特徴でもある。第二条では洛陽四十八願所巡拝をなかば義務付けているが、これもすでに述べた通り西方四十八願所撰定の経緯からみて了解されよう。

専阿の遺志を継いだ元阿は、西方巡礼の弘通に腐心している。巡拝奨励の具体的方法はどうかというところ、「数度の巡拝をすゝめ、めんための善巧方便に名目に十箇の差別を立て諸人を導くなり」とあるように、巡拝の回数によつて下記のごとく納札の種類に差をつけている。すなわち一回は一心を表し白紙に、三回目は三心三宝を表し青紙に、五回目は五種正行を表し黄紙に、八回目は八万四千の経教を表し上半分を銀紙、下半分を白紙に、十回目は十念を表し上全紙下白紙に、十五回目は十悪五逆をも撰取したまうを表し惣銀紙に、十八回目は念仏往生の願を表し惣金紙に、十九回目は来迎の願を表し上半金紙下半銀紙に、三十五回目は女人往生を表し木札長一尺五寸に、四十八回目は四十八願の別願を表し木札長一尺五分に、というようなものである。

また納経帳の件についても、納経は最初のみ頂戴し、二度目からは巡拝のたびごとに帳面に御印を一つずつ受け、自分の願望通りに回数が満ちたら塔姿を建立し、同行を集めて百万遍を修し供養するが、三五回以上四八回までに達した場合は石塔を建てて供養するとした。以上のごとく巡拝の回数によつてランクを設け、その奨励を促していることが知られよう。

四、新西方設置運動と巡礼保護

元阿は西方札所巡拝の広汎な普及を企図し、国々、郡々、あるいは各城下ごとに「西方四十八願所」の写しとして「国西方」「郡西方」「御城下西方」の設置を呼びかけている。新西方撰定にあつては、道心篤い上人の指示に従い、候補寺の本尊の縁起を調べ、札所にふさわしいかどうかを検討すべきだとし、札所と定めた寺には縁起を作つて道案内記に載せることとした。また板額に「新西方何番何村何寺」と書いて、詠歌（西方四十八願所の詠歌）三首を記し、各札所に納めさせるようにした。札所の撰定者は札所先達であり、その功德はもつとも大きいとされ、さらに巡拝の指導者や旅費捻出等のため「西方講」の組織化を提唱している。

西方講は六錢講ともいわれ、善光寺参りの六錢講のやり口を西方巡拝に活用しようとしたものである。すなわち、一人当り月六文ずつ掛銭し、一組に二百人、一カ年に一度ずつ閏取りさせ、当り閏を二人分用意し、二人に八貫文（一人につき四貫文）ずつ支給する。これが参詣旅費になるわけだから、比較的容易に多数の人びとが巡拝できる仕組みになっている。このほかにも元阿は、「諸寺院方へ心願を演奉る事」として、一般の寺院に対し次の事柄を期待している。①年中行事の折々に縁起集を題材に説教をしてもらふこと。②月並に西方講を開き講中の指導をしてもらふこ

と。③手習子が入寺したときには百人一首を教えるように西方詠歌の手ほどきをしてもらい、暗誦できるまでに導くこと。④ときには朝暮勤行式の指導もしてもらいたいこと、である。一方、札所寺院に対しても種々の注文をつけている。①札所中の如来で脇壇あるいは内仏などに安置の仏像をその寺の本尊として尊崇するように。②札所ごとに茶飲み場を設けてもらいたい。望むらくはその施設が籠り場を兼ね備えて建てられていることである。貧窮の巡礼者はそこに籠って念仏しながら一夜を明かすことができるし、念仏修行のために籠る人もいるであろうから。③納経は数が多いので一々認めず、版木を用意してあらかじめ半紙半枚に印を押しておく、本尊の御影などと一緒に三宝にのせ堂内の外陣に置いておけば、巡礼者にとっても手間取らなくて好都合である。

以上の諸点は、巡拝者側および札所寺院側に求められた事項であるが、巡礼行為がより大衆的広まりをみせ日常化してゆくためには、社会（特に巡礼コース地）の側における巡礼者への保護や援助は欠くべからざる条件となる。西国や四国等のように歴史と伝統を誇る巡礼は現地側の受け入れ体制も整っているが、日の浅い西方札所の場合はその点心もとない。元阿は西方巡礼の普及をめざして、巡礼者への保護ないし配慮を以下のように具体的に提示している。

第一に、「巡礼海道(街)に一軒屋を建置候事」とあるように、六坪ないし一五坪程度の簡易な家屋を西方・西国道中筋の村々のはずれ

に設置し、貧窮巡礼者の宿を確保して難渋を救おうというのである。但し、薪については山里に泊るときは巡礼者が一軒ごとに行乞して貰う。

第二に、「巡礼海道路みちつくり仕方の事」とあって、「巡礼の道筋みち作りとして有信の人の先祖并に両親杯の追善の為に作徳米四、五斗あかりぬる程の田地を永代の祠堂とし他人に作らせ、あひハ村役に預け其預る当屋より飯にし、中食として村中の人々一日出ておの／＼我事とおもひ深切に出精して某の村境まで大道普請掃除までも致し置なば巡礼老若いふに及はず、諸人牛馬に至るまで如何ばかりか悦ぶべき廣大の追福作善なかるべき事なり」^⑤と、道普請の功德を説いてその行為を奨励している。

第三に、「巡礼海道川々橋々無銭の事」といい、ここでは、道中筋の各川に橋を掛け、通行の利便に供すると共に、巡礼廻国の者や僧尼から橋銭などを取らぬよう願っている。そして、もし無銭で通せばその陰徳は広大で村中安全、福徳来集の縁となるとし、これを享受する巡礼者へは、即時に「村中各々現世安穩後生極楽」と誦して、十念を唱えて回向するように示した。

第四に、「巡礼海道道標立やう之事」で、巡礼コースの辻々に石の道標（正面の上方に念仏地藏尊を刻み、後光の上に「念仏地藏大士」と書く）を立て、巡礼者が迷わぬよう指示を正しくすべきだとしている。

第五は、「巡礼独旅泊宿之事」で、一人旅には善根宿もなく、旅

宿に不自由することが多いので、まず施宿の功德を説いている。長期間の巡礼には事故や病気はつきものである。それでも仲間がいれば心強いが、その点一人旅は心細い。そこで旅中の病人看護についても「村はづれの拾四、五間を離れ小屋としつらひ山里におり遠くはなれうせ出し玉ふ風雨寒暑の凌ぎよくして水気のなき床高きべからず犬狼恐れあり」と、男女をいはず日に五、六度夜に一兩度見廻り看病し遣したまふへし。尤医師方には薬を施し療治し遣したまふべし」と村々の理解と協力を要請している。

第六に、「巡礼接待茶場建様の事」と、巡礼者への接待を期待し、道中筋各所に茶場を建て、「巡礼の輩へ湯茶心の儘に施し、暑中には昼寝休息などゆる／＼致させ玉ふへし。長旅なればつかれもあればなり。又おり／＼たべものなどを施し玉ふへし。是又其村に限らず他所他国よりも持出し施し玉ふべし。其仕やう種々あり。餅・団子・赤飯・切飯・握飯・煮べ、汁・漬物・梅干・生薑漬・味噌の類、或ハ蕎麦粉・はつたひ・柿餅（中略）等の類也、又或ハ風呂・髪・月代杯をも致し遣し、或ハ草鞋・鼻紙・烟草の類、又ハ暑気はらひ、風菜・按摩・按腹針・本道の医師等ハ巡礼の宿に行治療し玉はん事を願ふ、云」など、かなり念の入った配慮を促している。

以上のように、元阿は巡礼者がスムーズに所期の目的を達成できるように種々心を砕き、行く先々の現地の人びとに手厚い保護を

訴えている。なぜこれほどまでにせねばならないのか。それは元阿の巡礼者聖視観、すなわち巡礼者に対する尊崇の念を抜きにしては理解できない。彼は「巡礼海道にて参詣の行者を大切ニ致すへき事」を掲げ、「惣して巡礼の行者を疎略に思ひたまふべからず。西方巡拝の人ならば都誓願寺の如来也と思ひ、西国巡礼の族ならば熊野権現なりと思ひ、四国遍路の人ならば弘法大師なりと思ひ、僧俗によらず行乞して巡拝する人ならば、上行者也と思ひ、福祐自在の巡礼ならば下行者と思ひ玉ふべし。勿論、行乞の人ハ僧俗とも多少によらず必ず供養したまふへし」と高唱しているのであつた。もとよりそこに巡礼者に対する暗い、負のイメージはない。

五、西方札所の引導守護仏・念仏地藏尊

念仏地藏尊は専阿の住した正住院の地藏堂厨子内に現存する。堂内の正面上方には「日本国中弥陀霊像四十八願所引導守護仏」と記した黒地の木額が掲げられており、往時を偲ぶことができるが、こんにちその由来を知っている人はほとんどいない。以下、念仏地藏尊の由来、またその利益について、『顕志録』所載の「念仏地藏尊縁起」などにより検討してみよう。

元阿によれば、念仏地藏尊は、「一切衆生利益の為に名香並に加持の土砂等を以吾師自ら煉熟拌作し」④たものといわれ、これを専

阿は正住院に安置し、近く引導堂と名付けられる一字を建立して、その本尊としたい旨記している。⁵⁵一方、前記『専念往生伝』の専阿伝にはつぎのような逸話が収められている。京都に専阿と親しい仏工何某というのがいた。ある夜高山に登った彼は、そこで小庵に出くわした。いかなる貴僧が住まいしているものかと思つて庵の中をのぞいてみると、そこには地蔵菩薩がおられ、ちようど地蔵菩薩の小像を造作されているところであつた。その傍には一人の僧が坐っていた。たいへん尊い思いに浸っているうちに夢はさめた。翌朝、かの仏工は専阿上人の西山善峰の庵室を訪ねてみた。すると前夜の夢でみたように専阿上人が地蔵尊の小像を造つておられ、そのそばに僧一人が坐していた。夢と異なることといえ、ただ地蔵菩薩と専阿上人とが變つていただけである。仏工は不思議なこともあるものよとよく感激し、専阿上人はまさしく地蔵菩薩の化現であるといつて、上人を生身の仏のように尊重恭敬したのであつた。

かの地蔵尊造像の後、専阿は、菩薩の白毫と宝珠とは是非舍利をもつて作りたいと考へた。伝え聞くに、加茂明神の宝庫には仏舍利数粒があるという。なんとかしてその舍利を二粒得たいものだと願う専阿は、七日のあいだ別時念仏を修して彼の明神に祈願した。修行を終えて加茂明神へ参詣し、近くの茶屋で休んでいると、見知らぬ一人の老翁が専阿の前に来て、「あなたに仏舍利を差し上げよう」と告げ、数粒の舍利を与え終るといふこともなく

消え去つた。これこそ加茂明神の化現にちがいないと思つて歓喜踊躍した専阿は、すぐさま拝礼して草庵に立ち帰り、やがてその舍利を使って菩薩の白毫と宝珠を作つたといわれる。専阿は、この地蔵菩薩を「念仏地蔵と称して、西方浄土へ引率^{みちび}四十八願所守護の菩薩」と仰いだ。あるとき、専阿が地蔵尊を礼拝した後頭をあげてみると、かの地蔵尊は弥陀如来に変身してゐた。これによつて専阿は地蔵と弥陀は各別でなく同体であると証得し、歓喜の涙を流して恭敬したといふ。⁵⁶

上記の話によつても、この地蔵尊が専阿みずから造像したものであり、人々を弥陀の浄土に導く守護仏として信仰されていたことがうかがわれる。地蔵は観音菩薩と並んでもつとも民衆に親しまれていた菩薩であつたから、その地蔵を媒介として諸人を西方浄土に結縁させようとの考へが働いたとしても不思議ではない。この点は「念仏地蔵尊縁起」に、「その心根ハ世の人多く現世のこのミを執し、後世の一大事を忘れたるを深くかなしミたまひて西方に心をよせしめむ為也」とみえるところから明らかである。つぎに、念仏地蔵尊の「引導守護仏」たるゆえん、現世利益の側面についてやや詳しくふれてみたい。

此世の意願有輩ハ此菩薩に祈願していふべし、我今日より余仏余行の雑^{まじ}なく専ら西方教主阿彌陀如来の願力にすかり、日課念仏遍臨終の夕までおこたらず勤めて往生極樂を願ひ奉るべし、其障りになりける諸病、災難の患を除かしめ玉へと御

約束まうし、明暮願生西方の為に念仏まうす人ハかならず何の願にても成就する事うたがひなし。³⁸

つまり現世の利益とは、弥陀の本願を信じ、往生極楽を願求してひたすら日課念仏に励む者には、その修行の妨げになる諸病・厄難等を除滅するというものであった。こうした念仏者への現当二世にわたる守護の功德は、専阿自作の「念仏地藏尊和讃」の次の件によく示されている。

猶その申(念仏)に障りつる 諸病災難もろもろの
憂を除きたまへよと 不思議の大悲を願ふべし
をしへのごとくまもりなば 此世後の世へだてなく
哀愍護念し玉ひて 心にかなひ満足す
あるひハ火難水難も 疫難劍難盜難も
きつねたぬきやおふかみや 毒虫毒蛇の難いなし
地震雷難船や 横病横死の患ひなし
悪魔鬼神ハ障せず 有^{あや}レ所難をのがれけり

(中略)

此世ハ菩薩に打任せ 守護したまへと定め置
後生ハ弥陀の一仏と 心を外に乱すまじ
殊に勝れし願あらば 籠る日数の其うちハ
殺生姪事肉酒や あらゆる悪事をつ、しめよ
よしやからだハ穢るとも 心を清くあらためて
日夜に六時三時まれ つとめて其願申すべし

其夜の常ハ往生の ために念仏はげミなば
菩薩ハ喜びまし〜て 願をかへたまふなり³⁹

ここには、現世のことは地藏菩薩にまかせ、後生は阿弥陀如来一仏に定めて念仏すれば、願いは必ず成就するとある。また前掲「念仏地藏尊縁起」によれば、往生極楽のための念仏を専らにし、傍らにこの菩薩の御影(枚数は百万千万ないし二万、一万、千)を海川池に流したならば、その流影の功德により諸願をかなえさせようとの地藏菩薩の霊告があつたので、さっそく専阿は菩薩の宝前において諸種の誓願をなし、四八日間の別時念仏を修行して御影の開眼供養を行うと、これを海川池に流した。

「念仏地藏尊和讃」には、この流影の功德によって、水中に住むあらゆる生きものまで平等大悲に浴し浄土の岸に至る。御影は大波小波と現じて海人を守護し、あるいは風雨と変化して三千世界に遍満し一切衆生を利益するから、先祖・六親眷属・父母等もその利益にもれることがなく、亡霊追善の供養にもなるという。また御影の直接的な効能を挙げてみると、これを毎朝水と一緒に飲めば(婦人は出産まで毎日飲むのが理想だが、せめて百日、五十日は精進して飲むよう勧めている)、親子の罪障消滅して安産し、子供は無病長命、善心強く智慧豊かに、愛染愛敬をなし、仏縁深く出世する。たとえ敵の子を懐妊したとしても、御影を飲めば生まれる子供は善心を生じ孝子となる。このようにしてその功德が伝えられる御影が、当時どのていどに流布していたかはこんにち

知る由もないが、この念仏地藏尊がいかに当時の人々の信仰を集めていたものか、左記の史料により、うかがってみよう。

奉願上候御事

願面ニ開扉之二字入候事
六ヶ敷開帳同様之支

一當寺本堂ニ安置仕有之候宮殿入念仏地藏尊、先年と秘仏同
様仕置候處、近在之者共信仰罷在追々為拜呉候様頼申聞候者
共も御座候間、右地藏尊并什物之内糸引名号、為諸人結縁修覆
助成、来亥三月朔日と廿一日迄三七日之内開扉仕為拜申度奉
願上候、尤寺末旦方納得仕何方ニ少茂故障之儀無御座候間、右
願之通被仰付被下置候ハ、難有仕合ニ奉存候、以上

嘉永三年戊十月

知多郡北条村浄土宗

正住院 印

哲 空

寺社御奉行所

右九日式日相濟、本寺へも如例願面差出添書之支

④

嘉永三年当時、念仏地藏尊は正住院の本堂内に宮殿入りで安置
されており、秘仏同様の扱いを受けていた。したがって近郷の信
者たちのなかには、親しく尊容を拝したいと希望する者もいたの
で、この際、寺側としては諸人結縁と堂宇等の修覆助成のため、
重宝糸引名号と念仏地藏尊の開帳を行いたいと寺社奉行所に申請
したのである。期間は三月一日から二一日までの三週間である。

このときの模様を明らかにし得ないが、「如先年之」と記された同
様の願書が六年後の安政五年十月にも出されている。わずかの史
料からではあるが、専阿没後の幕末期において、念仏地藏尊が秘

仏化し、近郷近在の庶民の信仰を集めていたことは見逃せない。
しかし、西方札所巡拝との関係などについては残念ながら現在の
ところ確かめられない。

おわりに

専阿の発願撰定にはじまる西方四十八願所巡拝は、弟子元阿の
努力によってかなりの条件整備が進められたと思われるが、残念
ながらその巡拝の実態を明らかにすることはいまのところむずか
しい。しいて云えば、正住院の山門右側前方に現存する弘化三年
五月、二五世哲空代造立の「西方第六番札所 糸引寺正住院」と
刻された大ぶりの石碑から、専阿没後にも巡拝が続けられていた
ことは確認できる。しかし、幕末の激動する政情のもとで、専阿・
元阿師弟の信仰的情熱にもか、わらず十分な定着をみないうちに
札所巡拝もいつしか下火になっていったものようである。なに
ゆえに定着をみる事ができなかったものか、理由はいろいろ考
えられよう。さしあたり私は次の三点をあげておきたい。第一は、
教団による組織的バック・アップを欠いていたこと。第二は、国
札や郡巡礼のように地域的完結性をもたなかったこと。札所が諸
国にまたがり広域化したことは一面積極的に評価さるべきである
が、そのことによりかえって伝統のある西国・四国・坂東等の大
霊場巡礼の影に隠れてしまった。第三は、第一の点とも関連する

が、札所が諸宗にわたり、本尊も特定宗派に制約されない阿弥陀仏であったため、教団(西山派)への帰属意識と結び付きにくかったこと。この点は円光大師二十五霊場巡拝が祖師(法然)信仰と結び付いて教団内に定着したのと対照的であった。

ところで、西方札所巡拝が他に与えた影響を窺わせるものがないわけではない。慶応二年、知多郡大野町東龍寺蓮乗の発願にかかる「尾州知多郡四十八願所」巡拝がそれである。設置の意図は「夫信州善光寺の如来は三國伝来之霊像、人の知る所なり。經に曰、四十八の大願をたてる十方の衆生を救ひたまふと。よつて此度当国知多郡に如来の霊地をえらび四十八願所と名づけ奉る。志趣は老若足弱のともから遠路の山坂にあゆみをはこびかたき人、且ハ家業障なき人のために近くうつして結縁せしめんとす」とあり、新西方の札所ではなく地域民衆を対象とした善光寺分身如来四十八願所の知多郡版であることがわかる。むろん正住院も二二番札所に入っている。分身如来の写しではあるが、蓮乗は西山派の僧であり、西方札所巡拝を知らないはずはない。札所の地域範囲からみて、西方札所巡拝から何らかの影響を受けたものとみるのが自然であろう。^①

西方札所巡拝の意図や特徴などについては、すでに本文でふれたので、最後にその信仰・教化史上における意義に關し一言しておきたい。第一に、発願者専阿は「時人称^レ之云^二西方行者^一」^②といわれた源光法師の遺風を欣慕し、自らを「隠士」と称している

が、彼の信仰上の後継者を自認する元阿もまた「隠士」であった。西方四十八願所の撰定並びに巡拝が、まずこうした寺院における世俗的利害から超脱した隠遁的専念主義者の念仏信仰運動として推進されていったところに注目せねばなるまい。彼らが教団に与えた信仰・教化上のインパクトは、浄土宗(鎮西派)における捨世派僧の念仏運動に比せられるであろう。

第二に、彼ら(専阿・元阿)の試みが、単なる弥陀巡礼のすすめといった域を越え、弥陀巡礼運動——巡礼の大衆化指向——としての性格を有していたことは、念仏信仰・教化史上、特異な位置を占めるものといえよう。

第三は、西方札所巡拝の場合、民衆的基盤をもつ「霊像」信仰や地藏信仰を巧みに取り込むとともに、巡拝の利益(臨終正念、念仏者護念など)を強調して衆庶の信仰を触発していることである。そこに民間信仰との融合がはかられている点注意しておきたい。

註

① 新城常三「新稿杜社寺参詣の社会経済史的研究」(塙書房、昭和五七年五月発行)一三七八―九頁参照。

② 阿弥陀仏を巡拝する風習については、伊藤唯真「仏教と民俗宗教」(国書刊行会、昭和五九年九月発行)九九―一〇三頁にかけて若干の記載がある。

③ 藤堂恭俊「法然上人遺跡二十五箇所巡拝に關して」(東山学園研究紀要)十八。伊藤唯真「近世における法然上人遺跡巡拝について」

(『仏教文化研究』二〇。のち伊藤氏の論文は前掲『仏教と民俗宗教』に収載される)。

④笠原一男編『近世往生伝集成』二巻、(山川出版社、昭和五四年二月発行)三三三―三四頁(『専念往生伝』巻之二)。

⑤『常滑町史編纂資料』参照。

⑥正住院は知多郡成岩村常楽寺末で龍松山御獄寺と号し、専阿没後八年目の嘉永二年一二月に寺社奉行所へ提出した文書の覚によれば、当時「寺内人数拾壹人、当寺旦那家七百三拾五軒、惣人数三千百拾五人、ノ三千百弍拾五人」とある。当院は『尾張名勝絵図』に境内の景観が載せられるほどの地方大寺で、専阿の代に僧門の掟が作られたり(文化一二年三月)、寺の記録を整理した『新古録』が編まれている。

⑦大谷大学図書館所蔵木版本。

⑧同右。

⑨『顕志録』二八丁左―二九丁右。

⑩同右書、二九丁右―三〇丁右。

⑪専阿『縁起』第四巻の巻末に、寛政四年三月、要阿の編んだ「洛陽四十八願所巡拝記」が収められているので参照されたい。この書によれば、正徳の初め、源光法師巡拝の話聞いた西三条内大臣実隆は高德の念仏者順阿に四八願の本旨を説示してもらい、深く寺々の尊像を信じ、ひそかに順阿と共に巡拝を果たしたという。のち、二条前関白綱平もこれを信じて代参をさせている。こうしてみると洛陽の札所は公家の信仰をも集めていたようである。

⑫『顕志録』三六丁左―三七丁右。

⑬『縁起』第四巻、六二丁右。

⑭同右同巻、五九丁左。

⑮同右書同巻末に札所掲載。なお、この札所は元文三年(一七三八)

伊勢国多気郡齋宮村積門観音寺の信阿の撰定にかかると。

⑯同右書同巻六〇丁右―左。また元阿は、西方四八箇所と洛陽四八箇所のうち七箇所の重複を除く八九箇所に、九躰寺での遠国遙拝の如き一箇所を加えた「百ヶ霊地」の巡拝を「広大の善縁」として強く勧めている(『顕志録』三六丁左)。

⑰『顕志録』三〇丁左―三二丁左。

⑱同右書、二二丁左―二四丁左。

⑲同右書、三七丁右。

⑳宣契編『祐天大僧正利益記』三巻(文化五年刊)など参照。

㉑隆円『専念法語』中(拙編『専念法語』五七頁)。

㉒『顕志録』三一丁左―三二丁右。

㉓同右書、三八丁右。

㉔同右書、二丁右―三丁右。

㉕同右書、一丁左―二丁右。

㉖同右書、三三丁右―三五丁左。

㉗同右書、三六丁右。

㉘同右書、六七丁右―左。

㉙同右書、三八丁右―左。

㉚同右書、四一丁右―左。

㉛同右書、四四丁右。

㉜同右書、四五丁右―左。

㉝同右書、四六丁右。

㉞同右書、五四丁右。

㉟同右書、五六丁左。

㊱前掲『近世往生伝集成』二巻、三三三―三四頁参照。

㊲『顕志録』五四丁右―左。

㊳『顕志録』五四丁左。

- ③ 同右書、五八丁左、五九丁右。
- ④ 念仏地藏尊の現当両益の願を専阿は「一切ノ有レ願之徒ハ、先ツ誓ニ此地蔵尊ニ、而シテ専ラ願シテ生セント西方ニ、唯ク念ニテ弥陀ヲ称シ名ヲ、傍ニ以テ大士ノ真影ヲ、流ニ於海川池中ニ、施セハ普ク法界ノ群類ニ、現当ノ益無レ勝ルコト焉」(『顕志録』六四丁右、左)と要約している。
- ④ 正住院蔵『新古録』。
- ④ 愛知県文化会館愛知図書館蔵『信州善光寺分身如来尾州知多郡四十八願所』。
- ④ 東龍寺の本寺三河国碧海郡中嶋村崇福寺に「善光寺如来御開眼分身四十八願之中一尊」が安置されていたことは専阿の『縁起』(第四卷六二丁左)にも見えるから、そうした本末関係も考慮に入れねばならないが。
- ④ 『縁起』第四卷五七丁左。

「西方四十八願所」札所一覽表

札所番号	寺名	宗派名	旧国名	現所在地	詠歌	翼添の歌	霊像由来
×	善光寺	天台	信濃国	長野県長野市 元善町五〇〇	みちびかんなつみ水くむ男女まで わかり安かる歌をしらして いそげ人弥陀の御船のかよふ世に のりおくれなばいつかわたらむ まぢかねてなげくとつけよみな人に いつをいつとていそがざるらん	たしなみにこれを覚えてとなへかし 益なきことを語るひまにも 縁ありて人とうまる、その中に 弥陀の誓にあふそ嬉しき かくばかりちぎりまします阿弥陀仏を しらすかなしき年をへにけり	弥陀、釈迦ニテ 尊ノ光明ニテ 如来出現ノ事 如来出現ノ事
2	曼陀羅寺	浄土西山	尾張国飛保	愛知県江南市 前飛保字寺屋敷 二二二	いつまでかあけぬくれぬといとなまん 身はかきりありことはつきせず とふとめよ金の玉のそれよりも 仏法僧のみつのたからを たましひもめいどもなきといふ人は 釈迦よりちえのいかにありてか	のちの世ときけば遠きにわたれども しらすやけふもその日なぬらん うけがたき身をいたずらになしてまし かゝる御法にうまれあはずば たましひの娑婆とめいどにかぶから 世にしにいきのありとしれ人	乗蓮上人、如 来ノ尊像ト曼 陀羅ノ姿相ヲ 感得ノ事
3	常念寺	浄土西山	尾張国一ノ宮	愛知県一宮市 常念町九	極楽も地獄もなしといふものは やがてならくにおつる人なり 釈迦仏も地獄の苦げんもしとかば ひとは血をはき死ぬとしめせり よき人と世にはいふともねんぶつを まうさぬものは地獄にぞゆく	おそろしやむけん地獄にをちゆかば ふたたびうかむことのなからむ 聞きてさへ身の毛いよだつ地獄餓鬼 落て行なばいかがしてまし 鬼の子は心よしとも人ならず 善人とても凡夫なりけり	召蓮上人、一 ノ宮明神ノ御 告ニ依テ如来 ヲ感得シ玉フ 事
4	祐福寺	浄土西山	尾張国部田	愛知県愛知郡 東郷村春木屋敷	ほんなうのごふにひかれてたれもみな 地獄よりほかゆきかたもなし ぬすみせず人ころさぬをよきにして 身にとがなしと思うはかなき いづるいき入るいきことのおもひこそ 地獄におつるたねとなりぬれ	後の世はまようならいととき、ながら みちをもとめぬ人ぞかなしき なにひとつ覚えてつみはつらじと 世におろかなる人はいふなり ゆきかよひねてもおきても世の人は 思ふもいふもさわりとぞなる	融伝上人エ白 山権現、弥陀 ノ三尊ヲ画キ 授ケ玉フ事
5	円福寺	時宗	尾張国熱田	愛知県名古屋市中 熱田区神戸町六三	よるひるに八億四千のつみとがは おもにとしらで身におひにけり われ人のつみはぼさつもしらねども たゞほとけのみしろしめしけり もしも又えんまのてうにいたりなば なげどさげべどそのかひはなし	善根もなきで戒法たもちえず 御法のみちにかでかなはん むしよの罪にすがたのあかならば 須弥よりかたき山と成らん 歯は落てゆきの白髪のおひぬるは それぞえんまの使とぞ知れ	熱田明神、権 阿上人エ本尊 ヲ授ケ玉フ事

(札所番号についている印のうち○は靈沢『円光大師二十五箇所案内記』に、□は愚仙『円光大師御遺跡四十八所口称一行巡拜記』の番内に、△は同書の番外に、☆は洛陽四十八願所に、×は善光寺分身四十八願所に、それぞれ入っている寺である。)

10 五劫院 浄土鎮西 伊勢国内宮菩 堤山	9 萱堂 真言 伊勢国内宮菩 堤山	⑧ 欣浄寺 浄土鎮西 伊勢国山田 三重県伊勢市 一之木町 二一六―七	7 国府弥陀 真言 伊勢国津	6 正住院 浄土西山 尾張国常滑糸 引寺 愛知県常滑市 保示三〇
<p>往生のためにこの世にうまれきてもとの悪趣にまたもかへるなわすれてもまたうまれんとおもふなよここはまよひの六道のつち極樂のやがてさとり身となりてまた世にかへり人をみちびけ</p> <p>もろもろのおしへはあれどすへの世の人のちからにたえてかなはずたま〜に修行のみちへす、めどもこ、ろのこまはあれまはる也しゅうぶつのにしきつなされはて、生死のうみにたゞよふぞうき</p> <p>いまの世におのれみづから修行してほとけになるを自力とはいふあみだぶのちかひにすがる御名よびて往生するぞたりきなりける自力にてほさつ位経るもやすからずましてほとけになるはかたきぞ</p> <p>もろ〜の仏はみすてましませどみだひとりこそたすけたまへれ誓願になむあみだぶといふ人をすくひとらずばみだとなのらじおのが身をこくあく人とかへりみてほとけの御名をたへずとなへよ</p> <p>たゞたのめよろつのみはふかくともわが本願のあらんかぎりは南無阿弥陀ほとけの御名のひとこえに無量のつみはつゆときへけりとのふれば願行ともにくそくせりくちにまかせて南無阿弥陀仏</p>	<p>おそろしや名もなき虫とうまれなば人にもえんの遠ふざかるらんよしやまた都卒天まで生れても生死をいづることほ悟りつ、じひをおこして人すくふなり</p> <p>戒行のあしこした、ぬわれらゆへちかひのふねにのるぞうれしき時すきて自力修行はならばこそ身をもこ、ろもかへり見よ人いかにせん日はくれかたになりぬれど西にゆくべき人のなき世を</p> <p>自力にはほさつも戒をやぶりなばもとの凡夫にかへるとぞきく他力には破戒ながらも唱ふれば往生成仏するぞうれしき諸ほさつもじりき成仏ならずとてにしにむまれて仏とぞなる</p> <p>みすて、も諸仏もみだにたのめとてじひのあまりにおしへたまへりあみだぶとならせたまへばたれもみな往生こそはたがふことなし</p> <p>たのませたのまれたまふみだなればたのむこ、ろも我とおこらじ</p> <p>みだたのむ人はあまよの月なれやくもはれねども西にこそゆけばんのふのつみはあれどもあみだぶとのふるくちにていりまします往生をせんとおもふを願としてまふす計を行とこそいへ</p>	<p>空蓮上人如来ノ御告ヲ蒙リ糸引名号ヲ書玉フ事</p> <p>覺乘上人、大神宮ノ本地仏感得シ玉フ事</p> <p>円光大師日輪ノ中ニ金色ノ六字名号ヲ感得シ玉フ事</p> <p>聖武天皇、本尊御建立ノ事</p>		

<p>× ⑮</p>	<p>14</p>	<p>13</p>	<p>12</p>	<p>11</p>
<p>勝 林 院</p>	<p>浄 土 院</p>	<p>聖 真 寺</p>	<p>来 迎 寺</p>	<p>仏 眼 寺</p>
<p>天 台</p>	<p>天 台</p>	<p>天 台</p>	<p>天 台</p>	<p>時 宗</p>
<p>山城国大原</p>	<p>近江国比叡山 極楽</p>	<p>近江国比叡山 日吉 聖真寺本地堂</p>	<p>近江国比叡山 坂本</p>	<p>近江国栗田郡 綾村</p>
<p>京都市左京区 大原勝林院町 一八七</p>				<p>滋賀県栗東町 綾八八九</p>
<p>阿弥陀仏はよきもあしきも有智無智も 貴賤男女もへだてたまはず</p>	<p>極楽を願ふにふじのたかねぶつ このうへもなきさとりなりけり 念仏をきくばかりにて生るれば となふる人はうたがひもなし むつかしきあんじんざたをやめよ人 いまにもしなばいか、しつらん</p>	<p>六字こそ大善根のくどくなれ 少ぜんこんは余経なりけり ねんぶつをすへの世々までつたへよと 釈迦は阿難に附属したまふ あなたふと無上功德の念仏に 諸仏諸教もこもるとぞきく</p>	<p>阿弥陀仏に釈迦はつたへを受つぎて 浄土の御のりときたまふなり 釈迦仏はなむあみだぶの功德をば 世に説かんとていでたまひけり ねんぶつの功德は釈迦も一代に とけどもつきぬのりのたふとき</p>	<p>ねんぶつをとなへて往生することは みだの本願釈迦の経説 となふればたかはでに生る、と 諸仏証拠にた、せたまへり 阿弥陀仏となへて往生もしせずば 六方諸仏のしたやくちなん</p>
<p>阿弥陀仏はよきもあしきも有智無智も 愚者も学者もかはらざりけり</p>	<p>かくてこそわれは了解をしたるぞと おもはばやがてじりきなりけり ぶつせんにつとむるときはうやまひて きよくせんにはしくことぞなき 念仏はたすけたまへととなふれば</p>	<p>名号をいかなることとたづぬれば たすけたまへのことばなりけり 定散の行も仏は説ながら 六字ばかりを附属したまふ 阿弥陀仏のしんじつしんのふかしぎの 慈悲ぞむもじの御名と成けり</p>	<p>十方の三世の仏も正覚を 弥陀によりつ、とらせたまへり 舍利弗も阿難もしらぬむつの字の 功德を凡夫いかでしるべき あなたふとなむあみだぶのむつの字に ふかきいはれのこもるとぞきく</p>	<p>死してのちわが身にそへる宝には 南無阿弥陀仏にしくものはなし しゅうぜうはほかの経にも有ぬれど 恒沙諸仏の舌相はなし 往生をたしかに思へ受やうと 諸仏のじひの証拠なりけり</p>
<p>証據ノ弥陀ノ 事</p>	<p>伝教大師、仙 人ヨリ古木ヲ 授リ如来ヲ刻 ミ玉フ事</p>	<p>慈覚大師、苗 鹿明神ヨリ古 木ヲ授カリ如 来ヲ刻ミ玉フ 事</p>	<p>源信僧都、来 迎仏感得シ画 キ玉フ事</p>	<p>神運如来、靈 像ヲ感得之事</p>

<p>20</p>	<p>× 19</p>	<p>☆× 18</p>	<p>17</p>	<p>16</p>
<p>知恩院</p>	<p>永観堂</p>	<p>真如堂</p>	<p>久保御堂</p>	<p>鞍馬寺</p>
<p>浄土鎮西</p>	<p>浄土西山</p>	<p>天台</p>	<p>天台</p>	<p>天台</p>
<p>山城国京東山 知恩院阿弥陀堂</p>	<p>山城国京東山</p>	<p>山城国京東山</p>	<p>山城国上鴨西念寺</p>	<p>山城国鞍馬寺 毘沙門天阿弥陀御鉢</p>
<p>京都市東山区 新橋通大和大路東 入ル三丁目 林下町四〇〇</p>				
<p>おろかなる我等が信はあさけれど ほとけの願の深きたふとき 殊更におもきつみある身をばなを すくはんとての誓ひなりけり のりえてはかちもろかひもいらばこそ たゞうら／＼のかぜにまかせよ</p>	<p>ほんのうのけむりもなみもた、ばたて みち一すちを西にこそゆけ かならずも機のよしあしによらずして となふるものをたすけたまへり 唱ふれば分陀利華とぞほめらる、 人の中にも人ぞまれなる</p>	<p>世にこへし大願力のたふときよ じひのほかなるふかしぎのじひ 妄念のよしおこるともすておきて たゞ一すちになむあみだぶつ にこりてもねぶつのためをなげ入れは こ、ろのみづぞきよくなりぬる</p>	<p>悪人をたすけたまふときくうへは すこしのつみもつくらざらなむ いさ、かのつみもみやまの夏の葉の 日毎にしげり身におほふなり となふればよしや十悪五逆罪 つくりし人もたすけたまへり</p>	<p>女人こそおとこにこへてうれしけれ 五七の願はいとたしかなり 往生を願ひながらの世渡りと おもふて御名をたへずとなへよ 悪人をたすけんとての弥陀なれば つくりしつみはさもあらばあれ</p>
<p>むらさきの雲の迎ひの蓮台に 手をかくるまでゆだんすな人</p>	<p>よろこぶとなげくとはらのたつ時も なに、つけてもなむあみだぶつ よしや身にあらゆる戒をたもつとも 御名を唱へぬ人ぞかなしき 弥陀たのむ心のうちにへだてなき ほとけはさらに身をばはなれず</p>	<p>罪深き身は中々に嬉しけれ さてこそたのめ弥陀のちかひを ほんのうは人の目鼻に似たりとて たりきの祖師はゆるしたまへり 片時もすめる心のあらばこそ すます心をすて、となへよ</p>	<p>ほころなよ弥陀をうしろにたつるとも まへにちこくのあるをしらずに 善根も悪事もなせば日にまして のちの世までもむくひぬくなり 成仏は五逆のものなはらぬとて 諸仏ばさつもみすてたまへり</p>	<p>つみふかく疑ひぶかき女人さへ 二重の願にあふぞ嬉しき 心には後生を先と大事にし この世のことを次と思へよ こ、ろだにたてしちかひにかなひなば 世のいとなみはともかくにも</p>
<p>事 本尊ハ八幡宮 ノ再来、人聞 菩薩ノ御作ノ</p>	<p>永観律師、本 尊ト俱ニ導カ レ玉フ事</p>	<p>聖真寺ノ縁起 二同ジ</p>	<p>如來ト云フ事 玉フ故ニ葉ノ 刻ミ仏身納メ リ弥陀ニ妹ヲ ノ葵草ヲ授カ 明神ヨリ二葉 行基菩薩、鴨</p>	<p>空也上人、自 筆ノ六字名号 ヲ毘沙門天護 持シ玉フ事</p>

25	× 24	☆ 23	△ 22	△× 21
花台廟	清涼寺	石像寺	安養寺	本覚寺
浄土西山	〔真言〕 鎮西	浄土鎮西	浄土西山	浄土鎮西
山城国京西山 華台廟曼陀羅堂	山城国嵯峨清涼寺阿弥陀堂	山城国京北野	山城国京寺町	山城国京五条
	京都市右京区 嵯峨釈迦堂 藤ノ木町四六	京都市上京区 千本通上立売上ル 花車町五〇三	京都市中京区 新京極通蛸薬師 下る東側町五二	京都市下京区 富小路五条下ル 本塩竈町五五八
往生は御名を唱ふと定めてしうへは余行も助業とぞなる結縁も助業もいまはさしおきて一向専修にしくことぞなしもしも人余仏余経をそしりなば弥陀の心にそむくとはしれ	とき過て益なき業を捨よかし五劫思惟はたがためぞそもちよろづの法のおしへをまじへずにまうすが一向専修なりけりたれもみなしやかのおしへに随ひてたゞ一すちに御名をとなへよ	われほどにつとむるものはあるまじとおもはゞやがてまのさほりなりおもてには信者と見せてまことなく心のをくにあくなたくみぞのすへの世は外の御法はうせはて、御名をとなふるばかりにはなる	念仏にきらへるものはなけれども名聞がまん用心をせよしのびつ、まふせといふにあらねども人目をかざる心おこすな名聞と心つきなばそのままにかざるこゝろはきへてうせなん	罪あれば下品下生もおよばじとひくき願ひはたれもかけなよわれはたゞ上品上生そのほかへむまれまじとのころほげぬる一丈のほりをこへんとおもひなば二丈三丈こえむとはせよ
名号の徳をあらはす余経ぞとおもへばすべてたふとかりけり慈悲深き神や仏のもろくの誓ひをつゆもかろしむなゆめ専修とて外のをしへをかろしむはおのが心のひがみなりけり	こざかしくかたことませて経陀羅尼よむよりもたゞ御名を唱へよあみだぶの別の誓ひの念仏にすけをさしなば雑行となる念仏も余行も釈迦のせつなれど六字は弥陀のやくそくぞかし	いつこにか命かぎりに勤めつるたふとき人のあるもしられず往生をねがふ誠のあさきゆへあくじをやめる心だになし念仏は弥陀の本願諸仏さへ世にのこさんと護念したまふ	高慢は八万四千のほんのうのかしらとなりて障りとぞなる人みなは深くねぶりに沈む夜は目をさましつ、われはとなえよ名聞にひきたてられて唱ふれどわがこへきけばまこと、はなる	極楽の門の外でもたりぬよとあはれつたなき心おこすなこのたびも往生せずばよしや人衆生化益のじひにたへなむ一筋の早瀬の川も渡らんと思ひこめなばきしにつきなん
西山国師、当麻曼陀羅ヲ写シ玉フ事	嵯峨天皇勅願ニ依テ西方ヨリ化人來テ本尊ヲ刻ミ奉ル事	菅相丞御作ノ如來ヲ地藏大士ノ御告ニ依テ本尊ト崇ル事	春日明神ノ御作逆蓮花ノ如來清氏ノ老女感得ノ事	安阿弥首尾五十年ヲ経テ本尊ヲ作り奉ル事

<p>30 九躰寺 真言 山城国西尾</p>	<p>29 即成就院 四宗兼学 山城国伏見大 亀谷</p>	<p>28 阿弥陀寺 浄土西山 山城国淀</p>	<p>27 八幡本地堂 真言 山城国八幡宮 御本地堂極楽 寺</p>	<p>光明寺 浄土西山 山城国京西山 粟生光明寺阿 弥陀堂 京都府長岡京市 粟生西条の内 二六一一</p>
<p>一向は心をこらすためぞとて ほとけやそしのふかき教へぞ 専修には現世のいのりなきずして 阿弥陀仏に二世をまかせよ 夢をかしたといやおもふあらましを かなへたりとていくほどの世ぞ うきことのかさなる身こそ嬉しけれ 世を厭ふべきたよりとおもへば 願へども浮世にこゝろとむれば つながる舟をこぐごとくなり ひし／＼とたのまばひと頼めがし なまざかしきは弥陀にうときぞ わすれずばよしと心をすましめて 御名を唱へぬ人ぞかなしき 信じても唱へぬ人は益ぞなき 心におもひ口にまふせよ 目におがみ口に唱へて耳に聞き 声が生まるゝしるしなりけり 念仏はたかき声にて唱ふれば いよ／＼功德は深きとぞきく たれもみな六字たしかに唱へよや 南無阿弥陀仏とつづつめず 日課とて念仏の数を定めねば 怠りがちに成やすきかな 怠らばきのふをけふにつとむべし あすをとりこすことはよからず 別時とて月に一日もし七日 御名つとめよとをしへたまへり 人おゝくあつまる時はよもすがら ねぶつのこえをたやさざらまし</p>				
<p>知らぬから一向専修念仏を そしるやからは地獄にぞゆく ともし火を神にき、げし光にて ゆき來の人もみちをこそみで 極楽へ参らん事をよろこばで なになげくらん穢土の思ひを 世のうさもちごくの苦にはくらぶまじ まして浄土はたのしかりけり 身のほどはとまれかくまれ機のまゝに 御名をとなふる人はたふとし わずらはず歳もよらざる根気ある わかきさかりにはげみつとめよ 明くれに浮世のことにつながられて たゞいそがしと終にはてなむ 浮世には心も身をもつくせども 後世にうとき人ははかなし かねをうち珠数をつまぐり身をせめて 大声あげてはげみとなへよ わが耳にきこゆるばかり唱ふべし また大声にしくものぞなき はや口に身をも心も打ちまかせ たすけたまへとはげみとなへよ 唱へつゝ、ねてもおきても往生を 忘れまじとの日課なりけり 一たびにつとめてよしと思ひては 臨終までをとりこすぞうき 折々は身をも心も励め人 供養はおのが心ころに みな人もかわるがわるにつとめよや 無間修とこそ祖師はおしゆれ</p>				
<p>能谷蓮生法師、 近江浮御堂ヨ リ負奉りテ來 ル事 行教法師、八 幡宮ノ御本地 仏ノ阿弥陀ノ 木像ヲ感得シ 玉フ事 悪治郎、如來 ヲ淀川ニテ網 ニ上ル事 維摩居士、淨 土ヲ現シ玉フ ヲ源信僧都感 見シ玉フマ、 ノ來迎仏ヲ定 朝ニ命ジテ刻 マセ玉フ事 本尊ハ九品ニ 表シテ九躰ノ 如來也、故ニ 九躰村九躰寺 ト号ス、俗ニ 九躰仏ゲトモ 云</p>				

31	□	□						(遠国十一カ所の 寫像逢拜)					
安養寺	阿蘇山	善導寺	来迎寺	妙法山	本覚寺	増上寺 黒本尊	手石阿弥陀仏	善光寺 燈籠仏	富士山頂	地奥ノ院	白山越南	寺奥ノ院	立山蘆嶺
浄土鎮西		浄土鎮西	浄土西山	真言	浄土鎮西	浄土鎮西	禪宗	浄土鎮西	天台	天台	天台	天台	天台
山城国市之坂	筑後・肥後国	筑後国山本郡	長門国厚狭郡 舟木村	紀伊国那智	奥州津軽合浦 外浜馬淵	武蔵国江戸芝	伊豆国	甲斐国		越中国白山			越中国立山
京都府相楽郡 木津町大字市 坂小字久保川五六	福岡県久留米市善 導寺町飯田五五〇				東京都港区芝公園 四一七―三五 青森県東津軽郡平館 村今別町字今別一九			山梨県甲府市善光 寺町二六六九					
<p>所作じゆずをつぼくりにして千よりは ざら／＼ぐりに数万かさねよ 追善は三宝供養いとなみて 百万遍をたれもつとめよ 念仏の数をむむをば自力ぞと いふは他力をしらぬ人なり</p>													
<p>たれもみな下根なりとてざら繰りに 祖師の慈悲にておしへたまへり 日課にも百万遍をひとりして つとむることはたふとかりけり 念仏をとゝむる人はあなうたて わが往生のかたきなりけり</p>													
<p>九郎本尊ノ事 熊野権現本地仏ニシテ覚超僧都ニ示 現ノ事 仏法未渡ニ裸形上人弥陀ヲ刻ミ玉フ事 神皇后三韓征伐ノ時住吉明神出現シ テ弥陀ヲ刻ミ玉フ事 鎮西国師ノ御作如来師工御詠歌ヲ告 玉フ事 慈覚大師正身ノ如来ヲ感見シ石像ヲ 刻ミ玉フ事</p>													
<p>コノ山大地中ヨリ涌出テ開ル事 如来、西本上人示現ノ事 祐天上人阿弥陀窟記ノ事 弥陀ハ熊ト現シ不動ハ鷹ト現シ慈興 上人ニ示現シ玉ヒテ山ヲ開ル事 弥陀ノ垂迹妙理権現ハ泰澄大師ニ示 現在シテ山開ル事</p>													

36 極楽院 法相	35 称名寺 四宗兼学	34 龍青院 三華嚴論	33 五劫院 四宗兼学	32 超勝寺 真言
大和国元興寺 中極楽院智光 曼荼羅	大和国称名寺 香烟仏	大和国奈良 大仏龍青院	大和国奈良	大和国二条超 勝寺清海曼陀 羅
奈良県奈良市 北御門町二四				
<p>安心に自力他力といふことは心ひとつのはこびなりけりわがかたに自力他力もすておきてたゞ唱ふるぞ他力なりけりほとけ出てよし念仏をとゞむともあくまのなせるわざとしれ人</p> <p>いやしとて御名をす、むる人ならばげにやほとけの使なるらん人ひとりす、むるこそは万徳の仏をつくる徳にこへたりひとこえもすてぬ誓ひを悦びていよ／＼かすをはげみとなえよ</p> <p>朝をきてかほをあらはぬれでにて西おかみつ、十こえとなへよあみだぶと十声唱へてまどろまんながきねむりとなりもこそせめ唱ふればねてもさめても阿弥陀仏はかけやかたちをはなれたまはず</p> <p>御仏のすがたかたちを觀ぜずと声にいだして南無阿弥陀仏靈驗をみると心にかけんよりたゞ往生と思ふこそよき往生をうたがひながら唱ふれば唱ふるごとに疑ひとなる</p> <p>疑ひもわが煩惱の雲なれば唱ふる声の風にはれゆくうつつちの大地はよしやはづるともわれはけつじやう往生をせん往生は世にやすけれどみな人のまことの心なくてこそせね</p>				
<p>自力ゆへ往生せぬもうかりけり他力の願にかなはざりせば一すじに無智もうまるとおもへたゞしるもしらぬもわたすちかひをわがのりはなふとしといひ念仏をいひやぶりなば邪道なるべし</p> <p>御名となへ往生すると定めなばわれはつとめて人をみちびけ皆人をわたさんと思ふ心こそ極楽へゆくしるしなりけりけふよりは命の終るゆふべまで身をつくしてもとなへよや人</p> <p>あけくれもねるもおきるも食時にもそのふしごとに十声となへよつばはくも二便も西に向ふなよねるには西にむかふなりけりたへまなくあみだ仏をねんずれば仏もつねにみすてたまはず</p> <p>觀念のねぶつは祖師も自力にて他力の法にあらずとぞいふいそがでも往生とげばあみだぶを心のま、におがみこそせめかくまでに疑ひ深き心かなゆるしたまへや南無阿弥陀仏</p> <p>疑へる人はともあれわれひとり往生せんと決定はせよ唱ふればうら思ひすることもなしおこたるにこそ疑ひもあれたゞまうせまうすうちには自らふかきまこともおこりこそすれ</p>				
<p style="text-align: right;">清海上人エ清 水觀音浄土ノ 相ヲ画玉ヒテ 上人ニ授ケ玉 フ事</p> <p style="text-align: right;">善導大師自作 五劫思惟ノ如 來ニ躰俊乘上 人入唐授來シ 玉フ事</p> <p style="text-align: center;">同斷</p> <p style="text-align: left;">清海上人、香 烟仏感ノ事</p> <p style="text-align: left;">奇重現シ浄土 ノ相ヲ智光上 人ニ画キ授ケ 玉フ事</p>				

41	40	39	38	× 37
総持寺	得生寺	浄土寺	金峯山	当麻寺
浄土西山	浄土西山	浄土鎮西	天 台 真 言	真 言 鎮 西
紀伊国梶取	紀伊国有田系 我得生寺法如 堂	紀伊国有田西 ヶ峰	大和国吉野金 峯山大塔阿弥 陀仏	大和国当麻寺 曼陀羅堂
和歌山県和歌山市 梶取八六	和歌山県有田市 中番二二九	和歌山県有田市 金屋町西ヶ峰 一四六六		
西方は諸仏のくに、たちこへて 極楽とこそよびたまひけり となふればこゝにるながら極楽の 聖衆の数に入ぞうれしき 御名よばばかしこにはさす顕れて わが名しるすとときくぞたのしき	となふれば神や仏もろ共に 祈らずともまもりたまへり 十方の神や仏とわかれても もとへ帰すれば弥陀の一仏 あふぎみよ弥陀の名号末ひろく 八万四千の経のかなめと	となへつる人のおほりにをのづから ほとけのむかひある道理なり やくそくのねぶつはまうしきむらふに やらふやらじは弥陀のはからひ 念仏をひくき御法と思ふなよ 神や仏もとなへたまへり	あみだぶの慈悲の光のめぐみにて われらが信のおこるたふとき 名号のつりばりのみしいろくづは いつかは弥陀の御手にひかれむ この身さへすきもあまきもそなふれば まうせば西へおのづからゆく	一度もたすけたまへと思ふより 唱ふるこえはまこと、ぞなる 極楽へうまれんと思ふころにて 南無阿弥陀仏といふぞ三心 本願の慈悲の深きを信ずれば これがまことの他力なりけり
余の国は寿命にかぎり有りぬれど 弥陀の御国は限りなきなり ねてもまたおきても弥陀のふところ にるぞとすればうれしかりけり 念仏をはげめばはなはさかへけり おこたるときはしほむとぞきく	世にこへてたてし誓ひの念仏を 神や仏のほめざるはなし ともすればとふとき御名を穢すぞと いみきらひては地獄にぞゆく 念仏は万徳所帰の徳ありて 神や仏のきかざるはなし	往生をもしうらなはば念仏を まうす人こそ一定としれ 往生は紫雲異香のきずいより となふる声ぞしるしなりけれ 唱ふれば文殊普賢も阿羅漢も 祖師もわれらも友となりぬる	みほとけの光にあへば罪人も いづるねぶつぞたふとかりけれ ねんごろにうまれさせんの願力に とりたてられて往生ぞする 悪事してからめとらるゝごとくにて となふるむくひ弥陀にひかれむ	まことかとたづねいだすにおよぶまじ 南無阿弥陀仏く あみだぶといふより外は津の国の 難波のこともあしかりぬべし おろかなるわれらが信をさきだて、 つきにはなさじみだの誓ひを
空眼上人臨終 ノ時如來躍リ 玉フ事	中将法女、弥 陀經一千部書 写ノ時此ノ如 來影向シ玉フ 事	万民水ナキ事 ヲ患エケレハ 如來岩山ヲケ ハリ玉ヒテ水 ノ通ヒ道ヒラ ケル事	行基菩薩、藏 王権現ノ御告 ニ依テ弥陀ノ 三尊ヲ刻ミ玉 フ事	弥陀觀音化女 ト現シ玉ヒ中 將法女曼陀羅 ヲ織リ玉フ事

<p>46 来迎寺 大念仏宗</p>	<p>㊦ 一心寺 浄土鎮西</p>	<p>44 天王寺 八宗兼字</p>	<p>× 43 上太子 真言</p>	<p>和泉国堺</p>
<p>河内国佐田</p>	<p>摂津国大坂一心寺引接尊像</p>	<p>摂津国大坂天王寺念仏堂</p>	<p>河内国上ノ太子磯長山叡福寺浄土堂 大阪府南河内郡太子町 太子二一四六</p>	<p>ながらへばねぶつのこうをつみく／＼て死なば浄土へまいるつきなむなにごともみないつはりの世の中にしぬるばかりはまことなりけり南無阿弥陀たすけたまへのほかはみな思ふもいふもさはりなりけり 看病の功德おほくてひろければことばのうへへのべがたきかな介抱を不足に思ふ病人は心いかれば地獄にぞゆく臨終はつねとおもひをわけ置きてわすれず折れ正念往生 もしや人やまひにあはゞ御名唱へ僧をたのみてうけよ十念 臨終は北をまくらに西に向きらいかう仏をまへにかけおけゆめやゆめやまひの人にむかひてはうきよのことをふつにかたるな 正念をいのりねがへよ誰もみないまはのきはの人にかわりて臨終の心は乱れやすければたれもしづかに御名を唱へよたとひまた火の車きてむかふ共となふる声に弥陀はらいかう 死期ちかくならばつきそふ人々も酒肉五辛の吞みくひをすな一息に御名一声つとなへよやはやくちなるは死苦ぞ増しけり末期には水はよからず湯を持ちてうるほすことはすくなきぞよき</p>
<p>拝腹の名号を湯に入れおきて十声となへて口をうるほせ</p>	<p>肉酒をくはゞあくまの誘ひきてうたてあくしゆにひかれそぞゆくたれもみな八万四千かつかつの塵勞門の死苦はのがれず</p>	<p>よるひるに御名いくたびも授かれよ死苦をのがれて正念となるをりをりは御手の糸をば手にかけて引接撰取のおもひなすべしもし人のおはらん時は念仏をす、むる人は善知識なり</p>	<p>臨終を今日と思ふにのびぬればへいぜいとこそまたはなりけり死ぬる身はにくやかはいやおしほしと心のこせばまよひこそせめ極楽を心のをくにたづぬれば南無阿弥陀仏の口にこそあれ 病人を仏のごとくうやまひてあはれむことは子のごとくせよあめ露をうけつ野山にはつる身をふかきなさけのいかはうとしれさいごにはあくまがきそひくるなれば正念なれと弥陀の来迎</p>	<p>三宅十五郎住吉明神ノ御告 ニ依リ海中ヨリ此ノ如来感得スル事 弘法大師、太子と同御母后ヲ御后御三方ヲ弥陀ノ三尊ト感得シ玉ヒテ三尊ヲ刻ミ玉フ事 太子、念仏弘通最初ノ事 毘首羯摩天御作ノ重盛公護持ノ事 八幡御本地堂ト縁起同断</p>

	<p>×△ ㊦</p>	<p>47</p>
	<p>誓願寺</p>	<p>慈光寺</p>
	<p>浄土西山</p>	<p>浄土西山</p>
	<p>山城国京寺町</p>	<p>播磨国阿弥陀宿</p>
	<p>京都市中京区 新京極三条下る 桜之町四五三</p>	
	<p>たのしやのあみだほとけを拜むれば 心も身をもきよくなりけり はだへさへ紫磨金色となりぬれば 生老病死のうきなたえにき うまるれば十地の願行自然にて いつとしらねど仏とぞなる</p>	<p>終るとき耳に近寄りいんきんを ひくいきごとにひとつならせよ ほとけには香華灯明供養して 御名となふよりほかないふまじ 諸菩薩は伎楽歌詠のをと高く まくらのもとにむかひたまへり</p>
	<p>極楽は寿命無量にながければ たのしみもまたつきることなし 身にまとふ衣服じねんにあらはれて 心にみつる百味おんじき ただまうせたゝと思はでたゝまうせ まうすがたゝのたゝまうすなり</p>	<p>いらふなよいらは、いよく死苦まして 心乱れてさはりとぞなる をはりなばや、ほどすぎてあつかへよ いそぐまじとは祖師の教へぞ 観音は蓮台よせてのせさせつ 勢至はつむりなでたまふなり</p>
	<p>天智天皇ノ勅 願ニ依テ地藏 観音普門子芥 子国ト現シ此 ノ如来ヲ刻ミ 上ル事</p>	<p>雲中ヨリ化僧 来テ海中ニ網 ヲ垂ル事、告 ヲ蒙リテ如来 ヲ感得シ玉フ 事</p>

Senna's Pilgrimage to Forty-eight Worshipping Places in the West in Recent Times

by Masatoshi HASEGAWA

Talking of pilgrimages in Japan, we first and foremost come to the images of Thirty-three Holy Places of *Kannon* (Goddess of Mercy) in Kansai and Kanto and those of Eighty-eight Holy Places of *Kobō Daishi* in Shikoku.

In addition to these well-known holy places, there were newly established various types of holy places called *Fudasho* (amulet-issuing temples or shrines) one after another since the mid-Edo period, with the advance of traffic conditions, monetary systems and economic situation in general and promulgation of people's faith in holy places in particular.

And thus, pilgrimages became more popular among people than ever. Besides, it should be noted that there were religious/enlightening movements by orders and priests, such as the establishment of *Fudasho*, in the background of popularization of pilgrimages.

As to worshipping the holy places related to the Jōdo sect, there are three types of pilgrimage as described in the following:

- (1) the pilgrimage to the twenty-five holy places of *Enkō-daishi* (there are forty-eight places in some cases) — making pilgrimages to the ruins in relation with *Hōnen*, the founder of the sect;
- (2) the pilgrimage to the “*Kantō Juhachi Danrin*”. (the eighteen temples with institutes for priests learning Buddhism in the east of Japan)
- (3) the pilgrimage to the forty-eight holy places of *Amitabha Buddha*, which Buddhists used to make in accord with the forty-eight wishes of *Amitabha Buddha*.

In this essay, I studied particularly on the third type of pilgrimage mentioned above, the pilgrimage to the forty-eight holy places of *Amitabha Buddha*, and examine the pilgrimage to the “*Saihō-shijuhachigansho*” (Forty-eight worshipping places in the west) which was selected by *Senna*, a priest from the *Seizan* sect of Jōdo, around 1830.

An outline of this essay can be given in the following major points :

- (1) process and characteristics in selecting "Fudasho" ;
- (2) aims of the pilgrimage ;
- (3) pilgrim's hymns and worship ceremonies at "Fudasho" ;
- (4) encouragement and protection of the pilgrimage ;
- (5) the characteristics of " Nenbutsu Jizō " (Buddhist invocation for blessing of Jizo, a guardian deity of children and travellers, the deity being the guardian Buddha for those who make pilgrimages to Fudasho.)

By examining and studying these points, I intended to clarify the significant meanings in the history of enlightenment and faith in Nenbutsu of the pilgrimage to " Saihō-shijuhachigansho ".